

二章 七十五巻本と十二巻本の形式的な違い

十二巻本は、その体裁・形式のうえで旧草とは際だって異なった特徴をもっている。

第一に、七十五巻本は天福元年（三十四歳）から寛元四年（四十七歳）まで、《現成公案》《行仏威儀》《坐禅蔵》《海印三昧》《行持》・《有時》《授記》《礼拝得髓》^{らいはいとくずい}《伝衣》《道得》《嗣書》を除いて興聖寺や吉峰寺で、大衆の前で説かれており、その説法の稿本あるいは、それを後でまとめたものである。ところが十二巻本はそもそも示衆を前提していない。それは最初から書かれたものであり、読まれることを意図されたものである。したがって七十五巻本の続きではあり得ない。

『正法眼蔵』の七十五巻本のスタイル、すなわちいわゆる則を、自分が和語でさまざまな角度から検討して弟子に示し、それを和語で書き残すというのは、禅宗史上画期的なできごとであった。しかし、いまやそのような「示衆」は、寛元四年《出家》以来、《洗面》が重ねて建長二年に示衆された以外、なされていない。彼は、ユニークなその説法を断念したのである。そして中国の禅の伝統の中でなされ、日本では道元が初めてだと自負される「上堂」の回数を増やし⁽¹⁾、それを漢文で弟子に筆録させたのである。おそらく道元はこれまでの「示衆」に、そしてそのようにユニークに法を伝えるということに、深い挫折を感じたのであろう。なぜかは後に問うことにしたい。

そして懷辨など、ごく側近の人しか見れないような仕方、というよりはおそらくは親鸞が「教行信證」でなしたように、なによりも己れ自身がみづからの思想を整理しようとして、「書き改め」といわれるとおり、『正法眼蔵』の書き直し、書き加えを図ったのである。

書くということは、示衆とどう異なるか。示衆はそのとき限りの勝負という側面が強いが、書いておけば後人はそれを何度も読み直すことができる。またそれは後期著作での經典の多用という、「示衆」にとつての不都合をカバーすることができる。

第二に、十二巻本には打坐のことがたえていられない。そればかりか「現成公按」「現成」「公按」という七十五巻本の根本語は、前の二語は現れず、「現成」が一度使われているだけである。

いったい道元は仏法として教・經を重視するあまり、只管打坐を忘れたのだろうか。

いや、そんなことはない。道元は晩期に説き方を変えたのである。いままでの「示衆」は、頻繁な「上堂」に変わったのだ。石井修道氏が述べるように、⁽²⁾上堂では十二巻本の經典引用をいぶかるほど、經典・教学を学ぶことではなく、只管打坐すべきことが力説される。鎌倉から帰つてまもなく、「作麼生かこれ上頭の関候子。良久して云く、瞿曇の經律論を擲却して、横に鉄笛を吹いて梅引を奏す」（『広録』258）と經典軽視と受け取れる言い方をしており、また「得仏の由来は実に坐禪なり」（『広録』286）と説く。翌年一月の上堂ではこう示す。

「すべからく光陰を惜しんで坐禪并道すべし、……初祖西来して諸行を務まず。經論を講ぜず。少林に在つて九年、ただ面壁坐禪するのみ。」（『広録』304）

あるいはのちにこう語っている。

「身心脱落好參禪」（『広録』306）

「仏仏祖祖正伝の正法はただ打坐のみなり」（『広録』319）

「參禪とは身心脱落なり、只管打坐の道理を聴かんと要すや」（『広録』337）

「仏仏祖祖の家風は坐禪并道ののみなり」（『広録』432）

次の一句は道元が坐禪を、説法や経より軽視しなかったことの証拠となろう。

「世尊、六年端坐して并道す。乃至、日日夜夜、坐禪を先とし、然る後、説法するなり」（『広録』432）

「妙行密行、横説じめつ堅説じせつに一如なり」（『広録』498）

したがって、この期の道元の思想を考えるには、『永平広録』を合わせ見なければ誤ったものとなろう。先に七十五巻本と十巻本が同じ水準で論じられないといったのは、このことも含む。『永平広録』巻三（251）から巻七（531）まで、七十五巻本の示衆が終わったところから始まる上堂の言葉は、十二巻本にない様々な思想を語り、それは多く七十五巻本に重なる。つまり道元は説き方を変えて、上堂しつつ同時に七十五巻本の再治をしていたのであろう。

第三に、資料の点で決定的な違いがある。旧草の資料は、『三百則』を含んだ『会要』『景德伝灯録』などの禪の語録・灯が最も大きな比重を占め、『法華経』『華嚴経』『大般若経』など主要大乘経典が続く。一方、十二巻本は、『大毘婆沙論』『四分律』『中阿含経』『増一阿含経』『俱舍論くしゃろん』など小乗の経・論が多く含まれ、『賢愚経』『仏本行集経』など中間経典と呼べそうな諸経、また『大智度論』『天台摩訶止観』『止観輔行伝弘決』など大乘論書が多用される⁽³⁾。それは建長二年（五十一才）に波多野義重をして永平寺に献納させた一切経に由来しよう。十二巻本における経律論の引用の多さからして、一切経献納は、波多野氏の発意というより、道元の要請であったと思われる。この期間の上堂には相変わらず禪

語録がテキストとして用いられるが、十二巻本『正法眼蔵』においては禅語録によつてはだめだと思つたのだろう。

第四に、その経論引用が非常に長くなつている。《一百八法明門》や《八大人覺》はほとんどが經典引用で占められている。これは草稿という面もあるうが、教学をしつかり書いて置こうとしたのではなからうか。

第五に、道元の特有な難解な表現を努めて避け、普通の思慮分別で分かる言葉で書かれていることだ。これはあきらかに道元の説示方法が変更されたのであり、決して新戒初学の出家のために平易に示したのではない。⁽⁴⁾ そのことは、後に「書き改め」の四巻においてさらに明らかにしていくつもりである。

第六に、十二巻本は旧草を書き改めて、新草と合わせ「都盧耆百卷」を意図したのだから、最後の《八大人覺》は別として、体系ではなく、なんらかの編集意図があつたと考えられる。編集について思い当たるのは、道元は仏法の編集の範を小乗の論經に求めたことである。《三十七品菩提分法》（寛元二年・四五才）は、『俱舍論』や『那先經』などに説かれる小乗の修行体系である「三十七品菩提分法」を説いたものである。新草の《一百八法明門》も『仏本行集經』に拠つた法の分類である。もともと小乗の法のまとめ方は数や量を目安とした。その点に目をつけて見れば、新草はほとんど数で法をまとめるものである。《三時業》・《四馬》・《四禪比丘》・《八大人覺》・《一百八法明門》はずばり数が巻名に入っている。《帰依仏法僧》も帰依三宝のことである。《受戒》は内容的に、三帰・三聚淨戒・十重禁戒である。《供養諸仏》だけが例外だが、これも十種供養、六種供養心を説いている。したがつて少なくとも十二巻本は何か数によつてまとめる意図が働いたのかもしれない。

では、このような形式的変化の理由は、いったいどう考えたらよいだろうか。

七十五巻本と十二巻本のあいだには、鎌倉行きという重要な出来事がある。

そこで道元が何を見、何をし、何を考えたかということが、十二巻本を読み解く鍵となろう。

鎌倉では、新しい幕府の下に、禅宗などが隆盛を見ていた。蘭溪道隆が宋から招かれ、鎌倉五山といわれるような禅寺がつくられ始め、將軍家の帰依も篤かった。道元がそこで見聞いた禅宗は、日本達磨宗の様子から推しても、武士の殺生を容認するような、宋よりもっとひどいものだったのではなからうか。

だが、実は道元も、その期待された「禅宗」に応じたのである。鎌倉に赴いた道元は、北条時頼（最明寺）の依頼に応じて、「教外別伝」などの歌を作る。

「宝治元丁未年、在鎌倉最明寺殿自北御方道歌を御所望の時、詠教外別伝」と序詞があつて、「荒磯の浪もえよせぬ高岩に、かきもつくべき法ならばこそ」と歌っている。高尚な教えである仏法は書き付けることができないというのである。五年前（仏教）で、「たとひ教外別伝の謬説を相伝すといふとも……」「しかあれども、教外別伝を道取する漢、いまだこの意旨をしらず。かるがゆへに教外別伝の謬説を信じて、仏教をあやまることなかれ。もしなんぢがいふがごとくならば、教をば心外別伝というべきか。もし心外別伝といはば、一句半偈つたはるべからざる也。もし心外別伝といはずは、教外別伝というべからざる也」と書いたのをよもや、忘れるはずがない。

また「不立文字」と題して、「謂すてし其言葉そのことはの外なれば、筆にも跡を留めざりけり」と詠んでいる。およそ道元が批判してきた宋朝禅の標語を題にして彼が歌を詠むとは！「不立文字」など『正法眼蔵』の中に一度も使われたことがない。むしろ「我が宗は語句のみ」（『広録』128）とさえ言われたのだ。しかし、それが「禅宗」のスローガンであるがゆえ、禅宗のなんであるかを明らかにするため、彼は節を曲げたのだ。いや、そもそも鎌倉に自ら赴いたこと自体が、自己の思想を裏切っている。『随聞記』にはこう書かれている。

「またある人すすみて云く、仏法興隆のために関東に下向すべし、と。答へて云く、然らず。若し仏法に志あらば、山川江海を渡りても来つて学すべし。その志なからんに、往き向かつてすすむとも、聞き入れん事不定なり。ただ我が資縁のために人を誑惑せむ。」（卷三）

こうして 道元はただ権力に近付いただけでなく、なによりも大事なはずの仏法の問題において、権力者に追従したのである。

誰でもない。自分自身に対して、道元はそのことを深く恥じたに違いない。鎌倉から帰山して翌日の上堂に「山を出でて相州鎌倉郡に赴き、檀那俗弟子のために説法す。今年今月昨日寺に帰つて、今朝、陞座す。この一段の事、あるいは人あつて疑著す。幾許の山川を渉りて、俗弟子のために説法する、俗を重んじ、僧を軽んずるに似たりと」（『広録』251）といわざるを得なかつた。弁明せざるをえないのだ。

自らに対する弁明の中で、自分もついに禪宗でしかないことに、彼は愕然としたのだろう。権力者も、そしておそらく真摯な求道者も、道元に「禪宗」を求めてくる。だが、この法門は「禪宗」ではないのだ、時遅しではあるが、もう一度自らの仏法の立て直しを、道元は百巻『正法眼蔵』として行おうとしたのではなからうか。その際、従来の『正法眼蔵』のように、禪の語録を主要テキストに使つて、難解な言い回しで説いているかぎり、誤解は避けられないと思つたのが、形式的變化の理由ではなからうか。弟子たちへの示衆をすっかり止めれば、また不満が出る。だから上堂は残したのだろう。道元が初めから、禪宗ではなく仏道を標榜したことは、初期『弁道話』ではっきり示されていた。

「この禪宗の号は、神丹以東におこれり、竺乾にはきかず。……まさにしるべし、これは仏法の全道なり、ならべていふべき物

なし。」

このことは最晩年の建長四年の上堂でも「かくのごとき祖師在世の時、未だ仏法をもって禪宗と称すとは聞かざりき。二三百年来より已来、猥りに禪宗と称す」（『永平広録』卷二）と確認される。

禪宗ではなく仏道を示すためには、禪宗以前の教え方、いや大乘仏教以前の教え方によらねばならないと彼は考えたのはなからうか。それはすでに伝統的教えの重要さを認識した《三十七品菩提分法》で暗示されていた。かれは一切経を波多野氏に献納させ、この路線をより徹底していくことにしたのであろう。

しかしながら十二巻本の思想は七十五巻とはひどく異なっている。いよいよそれを考えねばならない。